

Active Learning Methods: Classroom Practises in a Japanese: Liberal Education English Course

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47149

スカイプを使った日本語・英語交換交流プログラム
—金沢大学・エモリー大学の事例—

Active Learning Methods: Classroom Practises in a Japanese
Liberal Education English Course

伊藤 大将

ITO Daisuke

Abstract

This article reports on the Japanese/English language exchange via SKYPE between Emory University and Kanazawa University students. Emory University students who study Japanese and Kanazawa University students who volunteered to participate in this program were paired and conversed via SKYPE using Japanese and English for approximately 30 minutes each. After the program, the first author interviewed seven Japanese students and obtained feedback. The authors found students' increased motivations to work on speaking and listening skills and their struggles in intercultural communication. The students' feedback revealed challenges students faced in this language exchange and potential ways to improve this program.

1. はじめに

近年、スカイプを使った英語学習は大学でも取り入れられている(スプリング 2016、永松 2015、三田 2014 を参照)。日本人学生に英語のネイティブスピーカーと直接会話をする機会を作ること、学生は英語学習に対するモチベーションが上がったり(永松 2015)、英語でコミュニケーションをとることに対し自信がついたりすると報告されている(三田 2014)。本稿では、米国ジョージア州にあるエモリー大学で日本語を学ぶ学生と金沢大学の学生が行ったスカイプでの日本語・英語交換交流について記述し、その交流後に行った日本人学生への聞き取り調査から得られたフィードバックを報告する。今回のプログラムに参加した動機、スカイプを使つての日本語・英語交換交流から得られた学び、学生の留学意識について詳しく述べ、スカイプを使った日本語・英語交換交流の効果と課題について考察する。

2. 金沢大学とエモリー大学学生の語学交換プログラム

スカイプを使つての日本語・英語交換交流はエモリー大学の日本語教師から話をいただいた。エモリー大学では 2016 年秋学期に 1 年目(初級)の日本語の授業に登録している学生が 80 人、2 年目が 30 人、3 年目が 17 人、4 年目が 12 人であり、今回のプログラム参加者は 3 年生の 17 名である。エモリー大学に在籍する日本人学生は 5 人ほどと少ないため、学生が日本語教師以外の日本語の母語話者と話す機会は多くない。その機会を学生に与えようという意図が今回の活動が始まったきっかけである。

金沢大学国際機構留学生センターでは学期の初めに、日本語の授業に来て、留学生と日本語で会話をしてくれる日本人学生を募集する。その募集説明会で、エモリー大学で日本語を学ぶ学生とスカイプを使って日本語・英語で話をする交換交流を紹介した。金沢大学の日本語の授業に来て留学生と話すボランティア活動では日本語しか話す機会がないが、エモリー大学の学生は全員英語が堪能であり、日本人学生にとってインセンティブと英語学習になると考えたため、英語でも言語交流を行うことにした。

エモリー大学で中級(日本語学習 3 年目)の授業を受講している学生は 17 名おり、金沢大学からは 18 名が参加を希望をした(1 名は日本語の学生ではなく、日本語教師のアメリカ人配偶者と英語で会話をした)。エモリー大学の日本語教師が 17 組のペアを作り、メールアドレスを両方の学生に送った。学生は簡単な自己紹介をし、スカイプ活動を行う日時を決めるためメールでやり取りを行った。スカイプ会話のタスクの 1 つは「コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら」第 4 課、「日本のスポーツ」の読み物、「スポーツを通して学ぶ心」を読み、スポーツに関してお互いの意見を交換するというものである。具体的にはどんなスポーツが好きか、イチローの道具を大切にすることの姿勢についてどう思うか、スポーツをする目的にはどんなものがあるか、オリンピックを東京で行うことのメリットとデメリットは何であるかである。それ以外、会話の内容に関して制限はかけなかった。エモリー大学の学生は、話した内容をまとめたレポートを提出することが課題となっており評価される。スカイプでの活動は日本語 20~30 分、英語 20~30 分を目安にしてほしいというリクエストを出したが、大まかなもので強く縛ることはしなかった。

今回のスカイプ日本語・英語交換交流では日本語・英語の練習は意図されていたが、もう一点意図していたことは異文化コミュニケーションであった。文化の異なる人とのコミュニケーションでは、何気ない行動が失礼になったり、こちらが予測しない行動を相手をとったりすることが起こりうる。そういった体験は、学生にとって学びになると考えられる。しかし、深刻な問題が起こる可能性もあるため、異文化コミュニケーションに関して事前に日本人学生へ注意喚起のメールを送った。以下がその文である。

相手は異文化の人です。もしかしたら失礼な質問があるかもしれませんが、大きな心で受け止めてください。もし本当に不愉快な思いをした場合は、私に連絡をください。対応いたします。同様に、異文化コミュニケーションであるということを理解し、皆さんからの質問にも注意してください。例えば、何度も同じ質問を聞き返すのはやめましょう。答えるのを 1, 2 度拒否したら、答えたくない質問だと理解してください(例えそれが日本では一般的に聞く質問であってもです)。

異文化コミュニケーションが理由とみられる問題は 2, 3 件報告があった。詳しくは、第 5 章で報告する。

スカイプ会話終了後、エモリー大学の教師から日本人学生へ、米国側の学生のパフォーマンスを評価するよう、*evaluation sheet* が送られた。それを記入し、返信することで本活動は終了した。日本人学生、12 名が *evaluation sheet* に記入し返答をした。

3. 聞き取り調査

スカイプ言語交換交流がどのように進み、その取り組みに学生がどう感じたかを調査するため7人の学生から聞き取りを行った。事前に聞きたい質問は準備しておき、調査参加者には比較的自由に思ったこと、感じたことを好きな順序で話してもらい半構造化インタビューという形をとった。聞き取り調査はそれぞれ45分から1時間ほどであった。参加した学生の特徴は表1のとおりである。研究倫理の観点から仮名を用いている。

表 1: 聞き取り調査に参加した学生

名前	専攻	性別
小島	心理	女性
浅野	法学	女性
北川	国際学・米英	女性
武井	保健	女性
木村	国際関係	女性
瀬戸	法学	女性
松山	人文	男性

4. 学生のモチベーション

1名を除き、聞き取り調査に参加した6名の学生は、大学入学前から国際交流に興味のある学生だった。同じ学類の学生と比べて海外に興味はあるか尋ねたところ、すべての学生が他の学生よりも興味があると答えた。武井さんは、「周りの子と話していても、あんまりそんな、海外とか留学とか考えないっていう子が多くて...」と話してくれた。よって本プログラムに集まってきた学生は、外国人との交流に積極的な日本人学生だったと言える。

今回の交流プログラムに参加してくれた日本人は、日本語で留学生と話をしてくれる学生募集の通知を受け取って説明会に参加したため、外国人と日本語で話したいのであればスカイプを利用しなくても、日本語の授業のボランティアになれば直接話しをする機会はある。そのため、本プログラムへの参加理由を尋ねたところ、北川さんは、日本語の授業と自分の取っている授業がすべて重なっており日本語ボランティアができないこと、アメリカに興味があることが、本活動に参加した理由だと言っていた。一方、日本語の授業でボランティアをしながらスカイプ活動にも参加した小島さんは、「日本語の手伝いをしているときは英語に触れる機会はないんです。だから別かなって思っ。」と、武井さんは、アメリカに興味があるが、アメリカ人留学生と交流する機会がないことを理由に参加したと、話していた。著者は日本語の授業にスケジュールが合わず、参加できない学生が参加したのかと思ったが、英語を話したい、アメリカに興味があるという理由で参加した学生が一定数いた。

興味深いのは特に外国への興味がないと言っていた1名である。国際学類に所属しているが、語学に興味があって国際学類を選んだわけではなく、国際関係を学びたくて入学した。入学前には留学へ行く気がなかったが、入学してから留学を勧められたり、留学をした友達から楽しい話を聞くうちにだんだん興味が出てきたそうである。今回の日本語ボランティアに関しても説明会には

来ていなかったが、友達に誘われなんとなく面白そうだなと思って参加した。その学生にとっては、英語で話をする相手の学生が「日本語を勉強していることが安心材料」になったそうである。英語が得意ではないため、英語で会話をするにはためられるが、日本語学習の手伝いをすればいいという側面があったため、プレッシャーが少なくなり、参加を希望したと言っていた。

5. 英語に関する学び

大藪(2012)によると、金沢大学の学生は英語の「書き」と「読み」に対する自己評価が「会話参加」と「口頭自己表現」に比べ高くなっている。その理由として、「大学入学までの英語教育で会話練習の機会があまりなかったこと」が考えられる(大藪 2012)。聞き取り調査でも、金沢大学内で英語で他の学生と交流する機会がほとんどないことを学生は指摘していた。今回の日本語・英語交換交流は、英語を話す機会になったようで、学生は会話力(聞く、話す)の重要性を再認識したようだった。

本活動は金沢大学とエモリー大学の学生のメール交換から始まった。自己紹介文について尋ねたところ、日本人学生は自己紹介は大学の授業で習っており、proof reading をしなくても大丈夫だったというコメントが帰ってきた。しかしエモリー大学の日本語教師によると、1名の学生を除いて、「大学一年生」を「freshman」ではなく「1st grade」と表現するといった事例が見られ、自己紹介文にも更なる学習が必要なようだ。

事前に英語でどんなことを言いたいかわかり準備して会話に臨んだか聞いたところ、全員の学生が英語で事前に文を作るといった準備はしていなかった。北川さんは、「なんとかなるだろうもあるし、その場でやりたいって思って...」と、意図的に準備をしなかったと示唆している。会話はほとんどのペアが日本語と英語交じりであった。通じない単語を英語や日本語に翻訳して説明し、お互いの単語の間違った使い方を直しあったペアもあった。総じてエモリー大学の学生の日本語力のほうが金沢大学の日本人学生の英語力より高かったようで、困ったときは日本語を使うという形態ができていたようだ。日本人学生は全員電子辞書を手元に置いていたようだが、まったく使わなかった学生がほとんどであった。使った学生でも1回の会話で5回ほどで、日本語が通じないときにその単語を英語で調べるときに使ったそうである。

英語ではうまくコミュニケーションが取れず、日本語でのみの会話にしたペアもあった。武井さんが話す英語は通じたが、相手が英語で質問したことが理解できなかったり、返答に時間がかかったりして申し訳なく感じていたところ、エモリー大学の学生から日本語で話さないかと提案されたらしい。「あっちが日本語にしようと言ってきたんで、私は何も言えなかったです。英語だとうまく会話ができなかったのも、そういわれたらどうしようもないです。」と話した。英語でうまく会話ができなかった学生は、もっと英語を学ばなければいけないと感じたようだ。木村さんは、「スカイプやったのも大きいんですけど、英語話せるようになりたいなって思って...」という思いを吐露した。

一方、上手に話ができたと感じた学生は、自信がついたようである。書きや読みの英語能力には比較的自信のあった浅野さんは、「実際に直接話すのは最初結構ドキドキして...結構いけるなと思いました」と答えていた。浅野さんは、一人暮らしかどうか、どんなディズニー映画が好きか等を時には日本語で補ってもらいながら英語で一時間話をし、英語でコミュニケーションがとれることがわかり、自信がついたようである。

それに加え、エモリー大学で学ぶ中国からの留学生が英語も日本語も流暢に話す姿を目の当たりにし、自身の英語学習に対するモチベーションを上げるきっかけになったという学生もいた。エモリー大学で学ぶ留学生は、英語を流暢に話せる。またエモリー大学の中級レベルの学生は、日本語力も高く、日本人との会話もほぼ日本語のみで意思疎通ができる。複数の言語を流暢に話せる学生とのコミュニケーションを通し、日本人学生はせめて英語だけでももっとうまくならなければと感じたようである。もう一点、留学生と会話をすることで学んだことに「完璧な英語を話さなくてもいい」ということがある。きちんと文が作れなくてもコミュニケーションが取れること、アメリカで留学生として学ぶ中国人学生はネイティブのように英語を話せないことがわかったようで(例えば、アクセントがあったり、つまることもある)、コミュニケーションを取れる英語を話すことの大切さに気づいたようだ。日本人学生の聞き取り調査から見て取れるのは、本言語交流が「聞く」と「話す」能力を向上させたいというモチベーションにつながっていることである。

6. 異文化に関する学び

外国人と交流することでそこに異文化に関する学びがあったかどうかを尋ねたところ、多くの学生は時間を取って考えなければならず、質問に対する回答がすぐには得られなかった。その中でも最も多く出てきたのが、相手が英語を母語とするアメリカ人学生ではなかったという点である。松山さんは、「エモリー大学の学生イコールアメリカ人じゃないということにびっくりしました」と答えた。エモリー大学で日本語を学ぶ学生には、中国からの留学生が多い。アメリカの大学ではアメリカ人の学生が日本語を学ぶというステレオタイプがあるかもしれないが、留学生が日本語を学んでいるという点が、アメリカの大学に対する異文化の気づきであったようである。また、ニューヨークで育った中国系アメリカ人の学生と話した浅野さんは、アメリカ社会に存在するダイバーシティに関する気づきもあったようである。

また、アメリカ人に対するステレオタイプが間違っていると気づいた学生もいた。アメリカで育った人は「ノリがいい」というステレオタイプを持っていた瀬戸さんは、相手がシャイで話が滞ることがあったことに驚いたようだ。また、時間にもきっちりしていて、20分から30分経ったときに、「じゃあ英語にしましょう」ときっちり分けたことから、アメリカ人はノリのいい人ばかりではないことに気づいたようだ。

聞き取り調査に参加した学生の内、2人から英語の活動が全くなかったという報告があった。日本人学生はどうも「受け身」になりがちな傾向が見られる。中国人留学生と話した北川さんは、「英語でしゃべりかったです...けど最初に僕は日本語で話すからと言われて、あ、わかったよって言ってしまったから...その後に英語で話そうって言うかなと思ったけど、僕はずっと今日は日本語で話すってと言われて...」と、アメリカの学生がリードを取り、日本語でしか会話が行われなかったようである。聞き取り調査には参加しなかった学生から同様の問題でメールが送られてきた。指示では、20分から30分ほど日本語で、残りの20分から30分ほどを英語でコミュニケーションを取ることになっており、スポーツに関する読み物について話すことになっていたが、英語のコミュニケーションの部分が全くなかった上に、スポーツに関する読み物の話も皆無で、日本語で趣味等について話をして終わってしまったということである。エモリー大学の学生にはどのような指示が出ているのか、会話は日本人学生が進行すべきなのか、英語でのディスカッションの時間をとれないのかという問

いがメールには書かれていた。異文化コミュニケーションは今回の目的の一つになっているため、特に三つ目の質問の返答には次のような文を入れた。

「...一つ言えるとすれば、受け身で相手が「ここから英語の会話にしましょう。」と言ってくれるのを待つ必要はなく、20分くらい経った時点で、「ここからは英語でお話できますか。」と言ってもよかったですと思います...これは私が10年間アメリカで生活をしてわかったことですが、アメリカ人(それ以外の国の人に対しても)学生と話すときには、こちらが demand しないと、ほしいものが得られません...異文化コミュニケーションの難しいところなのですが、早川さん(仮名)から「スポーツの話をするようになってからスポーツの話しましょう。」とか「そろそろ英語での会話を始めましょう。」と言ってもよかったですよ。日本人にとってはやや難しいことかもしれませんが、異文化コミュニケーションでは必要なスキルだと思います。ただ、私もきちんと demand ができるようになったのはアメリカに住んで数年たってからで、今でも「ああ、言えなかった」ということは時々あります。日本人で異文化コミュニケーションをする人ならば、みんな通る道なのですが、早川さんは一人目でそれが起こってしまったのでしょう。不愉快だとは思いますが、まあレッスンになったくらい軽い気持ちで受け止められたら、気は楽だと思います。」

最後に、フィードバックに何が起こったかを丁寧な表現を使って(怒りメールにならないように)書くこと、「もう一回挑戦する」という気持ちを持ってほしいことを伝えた。次の学生からの返答には、「先生のメールを見て、今回の会話も異文化コミュニケーションの難しさを実感できたという点でプラスになったと思えました。」というメールを受け取った。本学生はエモリー大学の日本語教師にフィードバックという形でメールを送り、エモリー大学の日本語教師からは、「指示通りにやらなかった1名のパートナーと Skype をした金沢大学の学生からのメールは、立派に書けていた。感情的にならずに事実を述べ、どのように自分が感じたかを丁寧にかつ率直に述べていた。」と、誉め言葉をいただいている。

異文化に関する学びは、会話のやり取りや進め方の中にも見られた。北川さんは、「相手ははっきり何でも言う人やなっているのはすごい感じました。私が、ちょっとあんまりはっきり言いすぎたら、なんかあっちも、えって、なんかいきなり初対面であってそんなはっきり言うって思われたら嫌だなと思って、結構なんか、どっちかといえば受け身な感じで話をしていたんですけど、あちは思ったことはスパンとはっきり言うし、自分の進めたいタイミングで進めるし、意見ありますか、えーって考えてたら、いや別にそんな無理しなくてもいいですよ。なかったら次行きますっていう感じで...結構はっきりなんだなって...自分もはっきり主張しないと、なんか今は2人だからいいけど、3人とか4人に増えたら絶対何も言わずに聞くだけの人になるんだなと感じました。」と、受け身ではいけないことを感じたようだ。同様に木村さんも相手がこの部分は英語で、この部分は日本語でとリードをしたが、一言、「この分け方でいいですか。」という確認をしてほしかったと不満をもらした。また、英語が苦手だと言ったのに相手が英語をゆっくり話してくれなかったようで、「英語をゆっくり話してください」とはっきり言わなければならないことを学んだようだ。

相手の学生にやられっぱなしだったと言った北川さんはたくましく、会話の最後に何かありますか、と聞かれて、ちょっと悔しいと思いき々な質問をしたようである。その行動の裏には、「向こうに

全部進められて、なんか授業みたいに感じてしまって、授業ではないし、日本語だけになってしまっても、なんか利用されとると思って、なんか情報聞くためだけの人に思われたかなと思って、それでなんかそんなに都合のいい授業のための教材じゃないって思って、人やから対等に話したいって思って。」と、強気な姿勢が見られた。

聞き取り調査に参加した日本人学生の中で松山さんだけが自分がリードを取ったようだ。会話の途中だったが、30分経った時点で英語に変えてほしいことを伝え、そうしてもらったと言っていた。

また、マナーにおいても異文化を感じるがあったようだ。北川さんと話をした中国人留学生は、友達が部屋に入って来てしまい、その友達を追い出すために数分間退席したことが2回あったようである。それに対し北川さんは、「あっちの住んでいる環境もその自分のマンションの部屋とかじゃなくて何人かで借りて住んでいるみたいなんで、それは仕方ないかな、文化の違いかなって思いながら...」と、「文化の違い」を感じそれに理解を見せていた。

7. 留学への展望

聞き取り調査に参加した学生の多くが留学を希望しているか、留学の予定がある。しかし、学生は特に米国に行きたいと思っているわけではなかった。小島さんは、「英語圏の国への留学を考えている」と言い、浅野さんは、フランスへの留学を希望した(テロのせいで行けなくなった)そう。武井さんはニュージーランドへの短期留学へ行くことが決まっているが、スペイン語も勉強している。特にアメリカに興味があるという学生だけでなく、海外へ興味のある学生が本活動に参加したようだ。

スカイプ日本語・英語交換活動をがさらなる英語学習や留学へ行きたいというモチベーションにつながっているか尋ねたところ、つながったという答えが多く帰ってきた。浅野さんは、「ネイティブの方の英語ってやっぱ違うなって思って...なんかもう全然わかるはずのレベルの単語でも向こうの人が発音すると全然わからないことが多くて、ライオンキングのことを Lion King と発音されると何のことかわからなくて...文字で書かれていたら絶対わかる文でもその時、聞かれたらわからないとか、発音が違って...その場に行って本物の英語を聞くのが一番なんだなって感じました」と言い、現地に行って英語を学びたいという意識が生まれているようである。

8. 学生からのフィードバック

今後も金沢大学とエモリー大学間で日本語・英語交換交流の活動を続けることを視野に入れ、どのような改善が必要か学生にフィードバックをもらった。フィードバックはスカイプの使用、時差、会話のトピックの必要性、パートナーを変えるか、変えないか、活動の頻度、本活動を日本で英語の授業の一部にする可能性について触れる。

スカイプというデバイスを使うことに関して今回の活動で大きな問題は起こらなかったようだが、学校のコンピューターを使ったときにうまくスカイプが機能しなかったり、音声がかろうまく聞こえず、携帯を使ってスカイプを行った学生もいた。しかし、学生はスカイプを使って話すことに抵抗はないようだ。

時差に関しては、聞き取り調査では、それほど問題ではなかったと答える学生が多く、エモリーの日本語教師からの報告では、evaluation sheet の”Your partner was cooperative to set up the

Skype schedule.”という問いに対し、12名全員が「はい」と答えていた。しかし、実際には時差は少しトラブルを招いたようだった。米国東部時間と日本時間では、14時間の差がある。一組のペアは日本人学生が時差を一時間間違えてしまい、スケジュールの再調整が必要になった。他の学生は時差が大きな問題になったとは言わなかったが、瀬戸さんは、一時間取れる候補の日をたくさん出したので、すんなり決まったと言っていた。また、日本人学生は午前8時頃の朝早い時間から始めたことが多かったようだ。今後も続けてやるならばという話をすると、毎回時間を設定することは苦に感じるという答えが多数出てきた。

トピックに関しては、全員が与えられたほうがいいと回答した。特に会話が何度も止まってしまったペアは、トピックがないと会話が続かないと感じている。ペアの中にはスポーツにはあまり興味がない学生もいたようで、いくつかトピックに選択肢があるともう少し楽に会話が進められそうだという意見もあった。スカイプでの会話はエモリー大学の学生は課題を提出ことになっていたため、エモリー大学の学生が質問をし、それに対して答えるという形で進んでいったペアが多かった。北川さんは、質問をされ、その質問に答えると僕はこう思うと意見を言われ、次の質問に行ってしまうので、私はこう思うんだけど...というようなやり取りから会話が進展していけばよかったのにと感想を持っていた。また、ペアによっては個人的なレベルで会話ができなかったようで、個人的な会話がしたいという日本人学生もいた。個人的な会話ができたペアは、本活動の二週間前に中国へ行った日本人学生が中国のことを聞いたり、どうして中国人がアメリカで勉強しているのかと質問したり、麻雀が流行っている、好きなディズニー映画というような題材について会話をしたようである。トピックについての会話の時間と自由会話の時間どちらも取るのがよさそうである。

もう一度やってみたいかという質問には全員がまたやってみたいと回答した。同じペアがいいか、ペアを変えたほうがいいかという質問では、お互いの日本語・英語の癖がわかってくるし、お互いのことがよくわかればコミュニケーションが簡単になるという理由で同じペアがいいという回答が多かった。北川さんは、相手と共通点が少なく、会話もそれほど楽しんだ様子ではなかったのだが、「同じ人と続けるんだったら、たぶん問題なく楽しく話せるはずなので、むしろ楽しみになるんじゃないかな...もっと話していったらもしかして何か見つかるかな。」と同じ人と続けて話すことを希望していた。松山さんも「慣れると、その...英語を使うほうに集中できるということと、初めての人と緊張して話すという第一段階がない状態でスタートできるので、より楽な感じで英語を喋れるというのがありますし、もちろんいろんな人としゃべってもいいんですけど、それだったら表面的で終わってしまいそうな気がします。せっかく国籍を超えて合う機会があるから、ちょっと深い関係を持ちたいかなと思う。」と、同じ相手と話をし、友達関係を築きたいと考えているようである。一方、ペアを変えたほうがいいという意見を持つ学生は、私一人が日本人の代表になってしまうのがよくないのではないかと感じていた。ある程度パートナーを固定するのがいいだろう。

スカイプ活動は米国と日本の学年歴が異なるので一度で終了した。日本人学生は定期的に活動することを求めているようである。週一度となると多いと感じる学生が多く、予習がほぼなければ週一回でもいいという学生がいた。理想の頻度は二週間に一度程度で、時間を決めて毎回同じ時間にしてくれれば頻度が多少多くてもいいという学生がほとんどだった。一度で終了してしまっただけもあるだろうが、友達関係に発展したペアは一組だけだった。浅野さんは今でもエモリー大学の学生とメールの交換をしており、機会があったら会いたいと言っている。他にも、日本に行ったときに会おうと話している学生はいるが、別の機会を作ってスカイプを使って言語交流をす

るペアは一つもなかった。一度ではなく、定期的に行うことで、学生が求める友人関係を築けるかもしれない。

聞き取り調査に参加した学生は、本活動が金沢大学の英語の授業の一部になることを望んでいる。木村さんは、ボランティアの活動だと相手の言っていることがわからなくても日本人学生には何のデメリットもないが、授業の一部にすれば少しプレッシャーがかかり、わからないなりにもって一生懸命、相手の英語に耳を傾けたかもしれないと発言した。先段落で触れたように、授業の一部とすることで会話を課題をする目的になってしまう恐れがあるが、木村さんをはじめ日本人学生が言うように、日本側でも授業にすることで日本人学生の取り組みにより真剣さが生まれるかもしれない。

9. 終わりに

実験的に行った金沢大学とエモリー大学間の日本語・英語交換交流は、海外に行くことや外国人との交流に興味を持っている学生にとって英語で会話をし、異文化体験ができるという点においていい機会になったようだ。また、持病や財政的な問題で簡単に留学できない学生にとって、本活動は日本から離れずに国際交流を体験できるという利点がある。時差や異文化コミュニケーションで出てくるトラブル等、課題もあるが、大学が積極的に活用し、留学する前のスモールステップになる可能性があると考えられる。

参考文献

- 三田薫, 2014, 「スカイプ©英会話を活用した短期大学英语授業の試み: フィリピン人講師との1対1のオンライン英会話レッスンを授業に組み込むことによる効果」『実践女子短期大学紀要』2: 19-43.
- 永松美保, 2015, 「スカイプを用いた英語個別指導の学習効果と学生の反応」『九州共立大学共通教育センター紀要』6-1: 87-93.
- 大藪加奈, 2012, 「CEFR を使った英語力および授業に関する学生アンケート: 金沢大学のアンケート結果より」『外国語教育フォーラム』6: 63-77.
- スプリング・ライアン, 加藤富美江, 森千加香, 2016, 「東北大学・ノースカロライナ大学間のスカイプ・パートナー・プログラム: 英語コミュニケーション能力向上ツールとしての効果に関する調査」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』2: 263-269.

謝辞

本報告書の執筆にあたり、原稿を読みコメントをくださったエモリー大学、Russian and East Asian Languages and Cultures の Senior Lecturer、武田典子先生に感謝の意を表す。